文壇往来

女性作家の時代 ようやく花開く

「年齢ばかりが注目され、どこが新しいのか、わからない」。先日の綿矢りささん（19）と金原ひとみさん（20）の芥川賞最年少受賞に対し、こんな声が出ている。

金原さんの「蛇にピアス」は十人の選考委員のうち、五人○、四人△、×一人の圧倒的多数の支持で受賞。「スプリットタンって知ってる？」という印象的な冒頭で始まり、舌にピアスで穴を開け、先端を蛇のように裂いたり、背中に刺青を入れる十代のカップルの狂おしい愛を強烈なイメージで描いている。

綿矢さんの「蹴りたい背中」は四人○、三人△、三人×の過半数の支持で受賞。クラスからはみ出した女子高生がアイドルおたくの男子に寄せるデリケートな心の動きを清らかな筆でつづる。

作風は対照的だが、若い世代の純愛や身体改造、アイドルおたくという現代的な風俗を扱う点で共通する。「モチーフは違うが、ともに奇をてらわず、破たんがないのが評価された」と選考委員の村上龍氏。

新世代の受賞作はこれまでも文壇に新風をもたらしてきた。

石原慎太郎の「太陽の季節」は大人のモラルに反逆する青年を登場させ「もはや戦後ではない」ことを示した。大江健三郎の「飼育」は濃密なイメージの文体で新しい文学の到来を告げた。丸山健二の「夏の流れ」は死刑執行人の日常を描く渇いた文体で注目。村上龍の「限りなく透明に近いブルー」は麻薬やセックスの幻覚世界を描き、センセーショナルな話題を集めた。

平野啓一郎の「日蝕」も中世フランスを舞台に若い僧の至高体験を描き、活字離れ世代に衝撃を与えた。超越的体験を重くみる点で「日蝕」と「蛇にピアス」は近い。

今回の受賞作とこれらの優劣を即論じることはできないが、若い女性二人が、初めて同時受賞した意義は大きいといえる。よしもとばなな、山田詠美ら人気作家が築いてきた「女性作家の時代」がようやく花開いたのだから。この二作を芥川賞史上衝撃的な作品とみるよりも、若い女性作家のレベル向上の成果と受け止めたい。

（編集委員　浦田憲治）

掲載日 2004年01月25日 日本経済新聞朝刊 023ページ

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。